

専徳寺報

第482号

令和6年8月13日発行

浄土真宗本願寺派

専徳寺

〒740-0044 岩国市通津2764
☎0827-38-1124 FAX38-1000

<http://sentokuji-iwakuni.net/>

岩国 専徳寺

検索

歡喜会法要

御案内

浄土真宗は盆会を「歡喜会かんぎえ」と呼びます。故人を通して、自ら仏法に出遇えた喜びを味わいつつ、共々にお念仏申し今年の夏をしめくりたいと思います。

日程

8月30日(金) 昼 1時半〜3時半
31日(土) 朝 10時〜12時

ご講師

本願寺派布教使

深野純一師 (下関市)



31日…新物故者追悼法要

新物故者を偲びご遺族の焼香があります。

●参拝セット

①お念珠・②聖典・③門徒式章・④聴聞カード
どうぞお持ちください。

【法座奉仕】通津南地区 ※法座後の片付けをお願いします。



●法座余香(仏婦法座 6月17日)

ご講師は初めてのご来講の岡村遵賢師(下関市)でした。丁寧な一座を賜りました。

☀ サマースクール (8月4日)

21名の小学生が参加してくれました。土井先生の科学クラフトから夕方の屋台まで楽しい夏の一時でした。



室内オリンピック



屋台



科学クラフト
(ペンハムのビュンビュンごま製作)

如来・人・言葉 135

花ごぼれ なほ薫る

お念仏の人生を大切に歩んでいく



花田 照夫 (長明寺住職)

向田さんの墓碑

私たち人間、生まれようとして生まれてきた人は一人もいません。気がついたら生まれてきていたのです。そして誰とも代わることのできない「私」という人生を歩む。考えてみれば、これは不思議なことです。そして、その不思議な命を歩む者同士が「縁」という大きな世界の中で時間を重ね合い、互いの心に人生の記憶を響かせあっていく……これもまた不思議なことです。

昭和56年(1981)に飛行機事故で亡くなられた脚本家の向田邦子さんのお墓には、生前親交が深かった森繁久彌さんが手向けた、

花ひらき はな香る
花ごぼれ なほ薫る

という句が刻んであります。大切な人と過ごした時間、思い出は消えませんが、受けとめる大地にこぼれ落ちていった花からもその香りは、なおより一層「薫る」のです。

そして、「薫り」を胸に抱きしめる姿はやがて「合掌の姿」となり、「お念仏の姿」となっていくます。

私には25歳で亡くなった仲のよい友人がいました。大学時代の同級生です。亡くなる一カ月ほど前、彼から電話がかかってきました。その内容は、自分の結婚式に出席してほしいというもの。私は「本当におめでとう！心から楽しみにしている！」と彼に返事をしましたが、これが彼への最後の言葉となりました…。

葬儀からの帰途。疲れ果てて乗った列車。ぽっかりと穴の空いた灰色の景色。

私は「悲しい」という感情に埋め尽くされました。

「これからの私の人生、何度、彼のことを思い出すのだろうか。そして、そのそのたびごとに彼がもうどこにもいないということ、自分に言い聞かせなければならぬのだろうか。そんなつらい経験をこれから何度、繰り返ししていかななくてはならないのだろうか」

胸が苦しくて涙が止まらなくなりました。

お慈悲のなかで…

2年後。私は墓参りのため、佐賀県の彼の実家に行きました。ご両親に挨拶すると、「息子のために遠路ありがとうございます。私の車で一緒に行きましょう」と、お父さんがおっしゃいました。助手席に乗り、2人で墓地へ。

車の中、私はお父さんをふと見ました。運転席の横顔は、思い出の中の彼とそっくり。「ああ、この顔だ!」、学生時代の出来事がいくつも鮮明に思い出されました。

夕方。お寺に帰った私は、そのままご門徒宅に月忌参りへ。そして、その家のおばあさんに何気なく話しました。

「今日は、佐賀県へ友人のお墓参りに行きましたね。お墓へ向かう途中、お父さ

んの横顔が本当に彼そっくりで…。ずっと彼のことを思い出していましたよ」

すると、おばあさんは言いました。

「お父さんも同じでしょうね。あなたの横顔見ては息子さんのことを思い出していたでしょうね」

何気ないひと言でしたが衝撃を受けました。そして「本当にそうだな…」としみじみ思いました。

お父さんにしてみれば、私は亡くなった一人息子さんと同じ年の男です。私が彼のことを思い出していた時、きっと、お父さんも私の横顔を見ながら、息子さんとのかけがえのない時間をかみ締めておられたことでしょう。あの車内。互いが互いの横顔を見ながら、それぞれの心の中の大切な記憶を抱きしめていたのです。

お参りからの帰り道、お念仏が口からあふれました。

現在45歳。数年おきに行く彼の墓参り。墓前で手を合わせ、おつとめをします。そして、お念仏を申しながら、しばしば彼と言葉を交わすのです。

同級生として同じ時間を過ごした友が、「享年二十五」という止まった時間で墓石に刻んであるからでしょうか、時になんだか彼が若返っていくかのような不思議な感覚がします。しかし、その都度、彼が笑いながら「違うよ」と教えてくれる

のです。

「25歳で時間が止まることが不思議なのではなく、あなたが歩んでいる一瞬一瞬の人生が不思議なのだよ…」

浄土真宗は阿弥陀さまのお慈悲を「私」の上に受け取っていく仏道です。

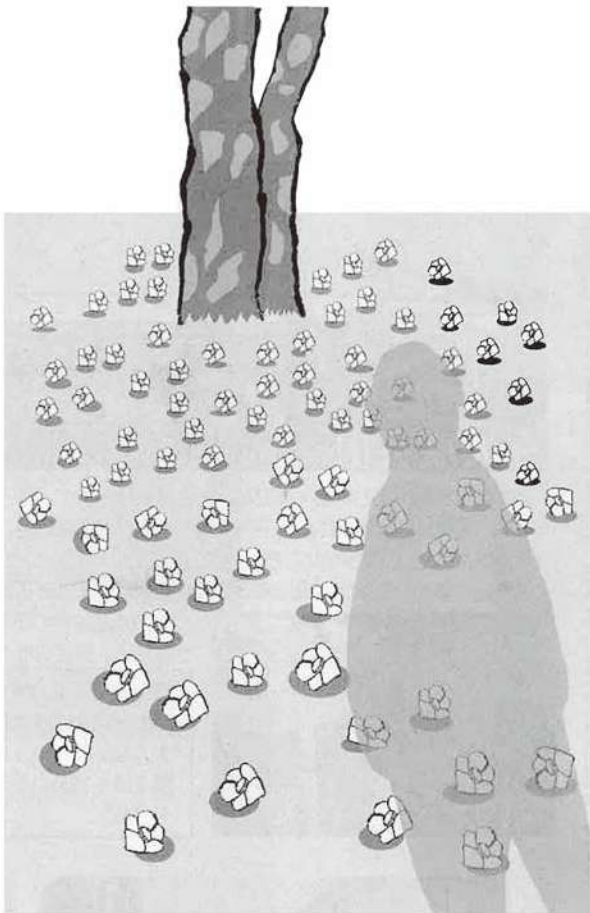
この阿弥陀さまは、私を深く見抜かれました。気がついたら生まれ、誰とも代わることのできない人生を歩む「私」。愛別離苦の中、涙を流しながら生きていく「私」。

しかし、この涙の中に宿りこんでくだ

さる阿弥陀さまは、南無阿弥陀仏のよび声となつて、私をまる抱えしてくださいます。お念仏は私が称えるものでありながら、阿弥陀さまのお慈悲のはたらきそのものなのです。

このお慈悲の南無阿弥陀仏を尊くたのもしくいたしながら、お念仏の「なほ薫る」人生をこれからも大切に歩んでいきたいと思ひます。

(本願寺新報2024年8月1日 みんなの法話より)

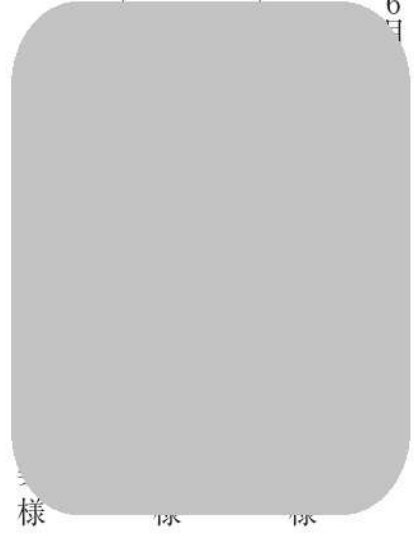


カッタ 林 義明

寺内だより

み仏にいだかれて〔葬儀勤修〕

6月



様 様 様

●ご恩を偲び〔法事勤修〕 6月1日〜8月4日

【通津】 武

野原



法物下附式〔入仏式〕

お給仕の日々、ご恩報謝の生活の始まりです。お慶び申しあげます。



●専徳寺倶楽部夏の集い（7月20日）

草刈りとおみがきの分担作業の後、副会長の増本眞一さんを偲んで勤行。総会では2年後の会長交代が決まりました。

【参加者】 秋嶋進一、浅井佐、上田浩之、小方基史、沖原政裕、岸井清市、吉柴伸一、北本征夫、木戸久夫、白田直則、白田憲光、中崎寛、半田正昭、廣田尚志、藤本昭範、増本英一郎、森上博之、森田幸一、山本正輝（19名）

ソウ マスト ゴー オン

僧 must go on

※元々は「Show must go on (最後までやりぬけ!)」

譬如日光覆雲霧
雲霧之下明無闇
(正信偈)

たとえば日光の雲霧に覆われども、雲霧の下、明らかにして闇きことなきがごとし

なぜ私が QUEEN のフレディ・マキユリーの真似をしているか。それはひとえに阿弥陀さまをたくさんの人知ってもらいたいからです。人生は苦難の連続。嬉しいこともあれば、同じ数だけ苦しいこともあります。でも、そんなどうしようもない私も、阿弥陀さまは見守り、絶対に照らしてください。空がどんなに曇っていても、その空の下が真っ暗になることはありません。先行きが不安な現代だからこそ、阿弥陀さまの救いをみなさんに知ってもらいたい！
We Will 誂終 You !

〔「坊主めくり：日めくり法語カレンダー」24日 松崎智海(焼香ファサー住職)より〕